

研究タイトル：

脳神経科学による道德メカニズムの解明



氏名： 小谷俊博 / Toshihiro Kotani E-mail: kotani@h.kisarazu.ac.jp

職名： 講師 学位： 修士(文学)

所属学会・協会： 日本科学哲学会、応用哲学会、日本倫理学会、哲学・思想学会

キーワード： 倫理学、脳神経倫理学、道德的責任

技術相談

提供可能技術：

・倫理に関する相談

研究内容： 道德概念の脳神経科学による改訂可能性

脳神経科学を参照しつつ道德メカニズムを探求する分野は「脳神経倫理学 neuroethics」と呼ばれ、道德心理学の一分野として位置づけられている。従来の当該分野における研究としては、道德判断の直観性や情動の重要性を示す研究、さらにはジレンマの判断における脳画像研究などが挙げられる。道德心理学がfMRIやPETなどの脳画像研究を取り込んだのは非常に重要である。なぜなら、脳神経科学の知見を取り込むことは、進化生物学や心理学が提起してきた仮説をメカニズムレベルで実証することが見込まれるからである。ただし、fMRIやPETによる脳の活動部位の画像化は、それ以上詳細なメカニズム的な記述が難しい。したがって、神経細胞レベル、遺伝学レベルのよりミクロなレベルで道德に関連する神経回路メカニズムを知るためには、異なる手法、異なる観点からの探究が必要であると考えられる。この認識のもと、新たな方向性をもった研究が、少しずつではあるが進められてきている。本研究は、こうした背景のもとで、以下の2点を中心とする。

【道德概念の脳神経倫理的モデル構築】

近年明らかにされつつある意思決定や他者ケアを実現する脳機能、たとえば腹内側前頭前野やオキシトシンの機能を参照しつつ、道德的行為や判断が生じるメカニズムを探求し、それに基づいてこれらの道德的諸概念の体系を再構築する。

【道德概念の改訂可能性】

日常的な道德概念としては、まず「道德的責任 moral responsibility」を挙げることができる。責任能力の有無は、司法の場でも難問として提起されうる問題であるが、脳神経科学の発展により、精神鑑定の手法が大きく変わる可能性は否定できない。より客観的な指標が与えられる場面が多くなるだろう。それと同時に、脳の疾患についての理解が深まることにより、道德的責任を問えないと判明する事例も増えてくると予想される。また、疾患であるという判断は、治療を促すことにもつながる。以上のように「道德的責任とは何か」という問題について、脳神経科学の発展が導くさまざまな変容を考慮しつつ、いかにこの概念が改訂されうるかを検討する。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	